

エゼキエル書25-28章「御民を侮る者たち」

1A 恨む国々 25

1B 悲劇を喜ぶ者 (アモン) 1-7

2B 選びを侮る者 (モアブ) 8-11

3B 復讐する者 (エドム) 12-14

4B 執拗に憎む者 (ペリシテ) 15-17

2A 高ぶる国 26-28

1B 裸岩となるツロ 26

1C 廃墟の町 1-6

2C 敵の攻撃 7-14

3C 島々の身震い 15-18

4C 地下の国 19-21

2B 海の真ん中で沈む船 27

1C 海の中の領土 1-25

1D 船と城壁の美しさ 1-11

2D 世界の品々 12-25

2C 世界にもたらす恐怖 26-36

3B 自分を神とする愚かさ 28

1C 刺し殺される君主 1-10

2C ツロの王ケルブ 11-19

3C シドンの刺 20-26

本文

エゼキエル書 25 章から 28 章までを読みます。私たちは 24 章において、エゼキエルが、バビロンによってエルサレムが滅ぼされる、神の裁きの預言を主が彼の口を閉ざすことによって終わらせられたところを読みました。そして主は、その周囲の国々に対して語るようにされます。バビロンによってエルサレムが滅ぼされる、という事実に対して、それぞれの国がどのように反応しているかを見ていくのです。そこにある、霊的問題を見ます。初めから申し上げますと、「恨みや憎しみ」そして「高ぶり」です。選ばれた民に対してそのような感情を持っているということは、すなわち、神ご自身を拒んでいる、その主権を拒んでいることに他なりません。人を恨んでいる時に、神ご自身に反抗しています。そして、自分は大丈夫だ、自分はすごいと自分を誇り、うぬぼれている時に、神を退けています。

神がそれらの国々に裁きを行われることによって、主ご自身が神であることを知るようになりま

す。人々が恐れを抱きます。それはちょうど、偽善の罪を犯したアナニヤとサツピラがペテロの前で倒れて死んだ事件によって、「教会全体と、このことを聞いたすべての人たちとに、非常な恐れが生じた。(使徒 5:11)」とあるように、です。聖なる神、主がおられるのだという、健全な恐れを抱くことができます。

1A 恨む国々 25

1B 悲劇を喜ぶ者 (アモン) 1-7

25:1 次のような主のことばが私にあった。25:2 「人の子よ。顔をアモン人に向け、彼らに預言せよ。25:3 あなたはアモン人に言え。神である主のことばを聞け。神である主はこう仰せられる。わたしの聖所が汚されたとき、イスラエルの地が荒れ果てたとき、ユダの家が捕囚となって行ったとき、あなたは、あはは、と言ってあざけた。

21 章の後半部分で、エゼキエルは既にアモン人に対する神の裁きを預言していました。バビロンがエルサレムを滅ぼしに北からやって来た時、まずアモンを攻めるかエルサレムを攻めるか、肝を使って占いをした箇所です。そこで、主はその呪いをさえ用いられて、エルサレムを攻めるようにされました。そこで諸国への裁きの筆頭に挙げられるのが、このアモンです。

アモンは長年に渡って、イスラエルの敵でした。アブラハムの甥ロトと、その二人の娘の近親相姦の関係で生まれた子がアモンとモアブです。その子孫アモン人は今のヨルダンの中部に住み着きました。士師時代にイスラエルを苦しめていましたが、サウルがアモン人と戦い、ダビデがアモンを制圧しました。ソロモンが死んで、イスラエルとユダに対して反抗始めて、機会があれば攻撃しました。けれども、その間にバビロンというとても強く強大な国が出現します。それで、ユダに対して敵意を抱きながらも、ツロとともにバビロンに反抗する連携を取っていました。そしてネブカデネザルはアモン、ユダ、ツロを攻めることを考えながら北からやって来ましたが、初めにユダを攻めたのです。その時に、アモンは非常に喜びました。ここに書いてあるとおりです、「あはは」と言って嘲っています。鬱積していたユダに対する怨念を、ここで晴らすことができたわけです。

主は、敵視すること、強く恨みを持つことに対する戒めを、箴言において行なっておられます。「あなたの敵が倒れるとき、喜んではならない。彼がつまずくとき、あなたは心から楽しんではいならない。主がそれを見て、御心を痛み、彼への怒りをやめられるといけないから。(24:17-18)」敵が倒れたことを喜ぶのではありません。共に悲しむべきです。

25:4 それゆえ、わたしは、あなたを東の人々に渡して、彼らの所有とする。彼らはあなたのうちに宿営を張り、あなたのうちに住まいを作り、あなたの産物を食べ、あなたの乳を飲むようになる。25:5 わたしがラバを、らくだの牧場とし、アモン人の地を羊のおりとするとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。25:6 まことに、神である主はこう仰せられる。あなたは手を打ち、足を

踏み鳴らし、イスラエルの地を心の底からあざけて喜んだ。25:7 それゆえ、わたしは、あなたに手を伸ばし、異邦の民にあなたをえじきとして与え、あなたを国々の民の中から断ち滅ぼし、国々の間から消えうせさせる。このとき、あなたは、わたしが主であることを知ろう。

アモン人は、エルサレムが倒れた後もユダの地域を不安定にさせて、自分たちにバビロンの目が向かないように仕向けました。エレミヤ書に書いてありますが、バビロンが任命したゲダルヤというユダヤ人を総督にして、ミツパという所で小さなユダヤ人共同体ができていましたが、それを良く思っていなかったイシュマエルは、アモンの助けを借りてゲダルヤを暗殺しています。けれどもこのアモンも、エルサレムが滅んだ5年後に、モアブとともにネブカデネザルが攻めています。その後、この地域に「東の人々」つまり、アラブの遊牧民らがやって来て、遊牧生活を送りました。「ラバ」はアモンの首都であり、今のヨルダンの「アンマン」です。今でもアマンの郊外にあるラバの遺跡の辺りには、アラブ人の遊牧民が羊やヤギを飼っています。文字通り、預言が成就しているのです。

2B 選びを侮る者（モアブ） 8-11

25:8 神である主はこう仰せられる。モアブとセイルは、『見よ、ユダの家は異邦の民と変わらない。』と言った。25:9 それゆえ、わたしは、モアブの山地の町々、その国の誉れであるベテ・ハエシモテ、バアル・メオン、キルヤタイムの町々をことごとくあけ放ち、25:10 アモン人といっしょに、東の人々に渡して、その所有とし、諸国の民の間でアモン人が記憶されないようにする。25:11 わたしがモアブにさばきを下すとき、彼らは、わたしが主であることを知ろう。

モアブへの裁きです。モアブもアモンと同じく、イスラエルに対する長年の敵です。場所は、アモンの南で死海の東側に位置していました。イスラエルが約束の地に入る前から、モアブの王バラクが預言者バラムを雇ってイスラエルを呪おうとしました。モアブもアモンと同じように、ダビデの時代にイスラエルに従属しました。けれどもその後、モアブもユダに反抗し、バビロンがユダを滅ぼした時にユダを侮りました。そのため、ヨセフスの記録の通り五年後にネブカデネザルが、アモンとともにモアブを制圧しました。そしてアモンと同じように、ナバテア人などアラブ系の遊牧民がそこを支配して、いつしか歴史の中から消えました。

神がモアブを裁かれた理由は、「ユダの家は異邦の民と変わらない。」と言ったことです。「ユダの家は、神によって選ばれた者たちなのに、異邦の民と変わりなく滅んだではないか。」ということです。神の選びを否定したことが彼らの問題でした。この世において、悪魔の偽りがあります。それは、「神の選びによって救われるということは、無いのだ。信仰を持っている者も、そうでない者も、結局は同じ結末に至るのだ。」という考えです。あるいは、「神を信仰しても、得になることはない。」ということです。私たちは、自分たちに悪いことが起こると、「虚しく神に仕えている」と感じることはないでしょうか？それこそが、悪魔による嘲りであります。

3B 復讐する者（エドム） 12-14

25:12 神である主はこう仰せられる。エドムはユダの家に復讐を企て、罪を犯し続け、復讐をした。
25:13 それゆえ、神である主はこう仰せられる。わたしはエドムに手を伸ばし、そこから人も獣も
断ち滅ぼし、そこを廃墟にする。テマンからデダンに至るまで人々は剣で倒される。25:14 わたし
は、わたしの民イスラエルの手によってエドムに復讐する。わたしの怒りと憤りのままに彼らがエド
ムに事を行なうとき、エドムは、わたしが復讐するということを知る。..神である主の御告げ。..

エドムはモアブの南にある、死海南部の国です。エドムも、アモン・モアブと同じくイスラエル人の
遠い親戚です。ヤコブの双子の兄として生まれたエサウは、その長子の権利を失いました。レン
ズ豆の煮物と引き換えに、エサウはヤコブに長子の権利を売りました。そして父イサクがエサウを
祝福しようとした時に、ヤコブはエサウに変装し、その祝福を受けてしまいました。それでエサウは、
父イサクが死んだ後でヤコブを殺すと言ったのです。この憎しみと復讐心が後の子孫エドム人の
特徴となりました。イスラエル人を率いるモーセが、エドムの地を通過させてほしいと頼んだところ、
彼らは脅迫して拒みました。アモンとモアブと同じく、ダビデがエドムもイスラエルに従属させまし
たが、その後、反逆し、ユダの王とエドムの間での戦いが続きます。バビロンがエルサレムを攻めた
時に、エドムは加勢します。この様子は、エドムへの預言があるオバデヤ書に詳しく載っています。
彼らはいつまでも復讐心を抱き、機会があれば憎しみを込めてイスラエルを貶めたのです。

そしてエドムは、バビロンによって滅ぼされたユダの地域に住み着きます、ギリシヤ人とローマ
人に「イドマヤ人」と呼ばれます。ギリシヤ時代、マカベヤ家の勇士たちによって彼らは叩かれて、
ヨハネ・ヒュルカノスによって強制的にユダヤ教に改宗させられました。その末裔がああヘロデで
あり、異邦人でありながら形としてはユダヤ教徒であり、ユダヤ人の王となった所以です。ここに
「イスラエル人の手によってエドムの復讐する」とあるのは、このマカベヤ家の者たちによって成就
しました。

人をいつまでも恨み、憎むことの弊害を私たちはエドムにおいて見ることができます。ヘブル人
への手紙の著者は、エサウの例をとって苦みを抱くことに注意を喚起しています。「そのためには、
あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出し
て悩ましたり、これによって多くの人が汚されたりすることのないように、また、不品行の者や、一
杯の食物と引き替えに自分のものであった長子の権利を売ったエサウのような俗悪な者がいないよ
うにしないで。(12:15-16)」私たちは「汚れる」というと、たいてい不品行や不道德のことを思い出
しますが、苦みや赦せない思い、憎しみは、聖なる神の前であってはならないもの、裁きの対象なの
です。

4B 執拗に憎む者（ペリシテ） 15-17

25:15 神である主はこう仰せられる。ペリシテ人は、復讐を企て、心の底からあざけて、ひどい

復讐をし、いつまでも敵意をもって滅ぼそうとした。25:16 それゆえ神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは、ペリシテ人に手を伸ばし、ケレテ人を断ち滅ぼし、海辺の残った者を消えうせさせる。25:17 わたしは憤って彼らを責め、ひどい復讐をする。彼らは、わたしが彼らに復讐するとき、わたしが主であることを知ろう。」

ペリシテ人です。今、時計周りで主は預言を行なっておられます。アモンから南下してモアブ、エドムです。それから南西の地中海沿岸にある国がペリシテです。彼らは元々、地中海の海洋民族であり出身は「ケレテ」すなわちクレテ島であると言われています。クレテ島には、ペリシテ人の作った遺物が博物館に展示されているそうです。周囲の国々は同様に憎しみをイスラエルに対して持っていたようです。士師の時代、ペリシテ人と戦ったのはサムソンです。神の箱は、内陸まで攻めてきたペリシテ人によって奪い取られました。少年ダビデは、ペリシテ人のゴリヤテと戦いました。他のアモン、モアブ、エドムと同じくダビデがペリシテを制圧しましたが、歴代のユダの王の時代にユダに反抗しています。そして彼らも他の国々と同じく、民族として歴史から消滅しました。ギリシヤ時代にアレキサンダー大王がガザの王を倒して以来、マカベヤ家のハスモン朝の中で同化していったようです。

彼らもエドムと同じ問題を抱えていました。この「いつまでも敵意をもって」が大事ですね。私たちが怒りを抱く時に、怒ったままではいけないと主は命じられます。「怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでははいけません。悪魔に機会を与えないようにしなさい。(エペソ 4:26-27)」

2A 高ぶる国 26-28

そして次はツロに対する預言です。26章から28章までに至る長いこの預言は、26章においては、神の預言がいかに歴史において成就したかを見ていきます。27章においては、海の真ん中でタイタニック号のように沈むツロを描いています。28章においては、ツロの真の王、サタンそのものを暴いています。

1B 裸岩となるツロ 26

1C 廃墟の町 1-6

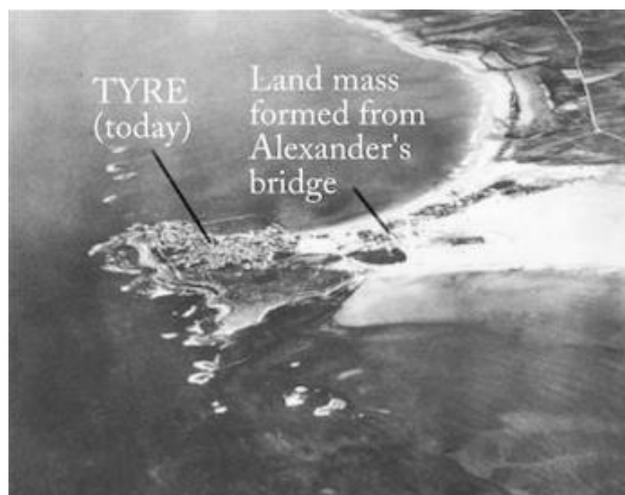
26:1 第十一年のその月の一日に、私に次のような主のことばがあった。26:2 「人の子よ。ツロはエルサレムについて、『あはは。国々の民の門はこわされ、私に明け渡された。私は豊かになり、エルサレムは廃墟となった。』と言ってあざけた。

預言をした時は、「第十一年のその月の一日」ですが、紀元前 586 年のことです。つまり、エルサレムが陥落した辺りです。その直前に主が語られたのかもかもしれません。ツロも他の周辺諸国と同じように、エルサレムの破壊を嘲っています。けれども、その理由が少し違います。「私は豊かにな

り」とありますね。もっと経済的な理由、物質的な理由から嘲っています。午前礼拝でお話したように、ツロは地中海を制覇する都市国家でありました。沿岸地域には数々の植民都市を建てました。世界を相手にして貿易をして、甚大な富が集積しました。

イスラエルとの関係において敵対感情なものはありません。しかし世界貿易にて、ツロは海洋を舞台にしていたものの、陸上は「海の道」と「王の道」の国際幹線道路が通っているイスラエルとユダによって邪魔されていました。その競争相手が今やなくなりました。「国々の民の門はこわされ、私に明け渡された」というのは、町の門にてユダが貿易商人らに関税を徴収していたけれども、今は廃墟となって、ただ通り過ぎるだけでよくなったので、そこをツロが支配することができるようになった、ということです。このように富によって世界を支配する中心部に対して、神は徹底的な裁きを行なわれます。次の 26 章を読むと、それは黙示録 18 章に出てくる大バビロンの崩壊とそっくりであり、27 章を読むと、その背後にサタンそのものが働いていることを見ることができます。この世の典型です。

26:3 それゆえ、神である主はこう仰せられる。ツロよ。わたしはおまえに立ち向かう。海の波が打ち寄せられるように、多くの国々をおまえに向けて攻め上らせる。26:4 彼らはツロの城壁を破壊し、そのやぐらをくつがえす。わたしはそのちりを払い去って、そこを裸岩にする。26:5 ツロは海の中の網を引く場所となる。わたしが語ったからだ。…神である主の御告げ。…ツロは諸国のえじきとなり、26:6 畑にいる娘たちも剣で殺される。このとき、彼らはわたしが主であることを知ろう。



「打ち寄せる波」は、一つの国が攻め上っても、それだけでは倒れることはなく、後の時代にまた別の国が攻め上る姿を表しています。アッシリヤ、バビロンのネブカデネザル、そしてギリシヤのアレキサンダー大王が攻めています。非常に小さい国であるにも関わらず、彼らは町を海の中にまで突き出ている城壁で取り囲み、そして海では非常に優れた海軍を有していたため、大国であってもなかなか倒すことのできない難攻不落の状態がありました。

しかし、その強い城壁もバビロンのネブカデネザルが破壊します。そして「やぐら」とありますが、「塔」と訳したほうがいいかもしれません。宝石でできたとても美しく美しいものだったそうで、夜でも光り輝いていました。それそのものが彼らの神、偶像であったそうです。そして驚くべきは、ツロが「裸岩」になるという預言です。「ツロ」の名前は「岩」という意味ですが、神は文字通り裸岩にされました。これはギリシヤのアレキサンダー大王が行ないました。その土までをもはぎ落とす作業

を行ないました。さらに、「海の中の網を引く場所となる」というのも、驚くべき正確な預言です。乾かすために網を引くのは陸の上でなければいけませんね、けれども「海の中」と表現しています。これは文字通り起こりました。以前は海であったところに瓦礫をアレキサンダーが放り投げて、そこを土手道にしました。それが長い期間によって半島になりました。その上で、今、レバノンの漁師は網を引いて乾かしています。

2C 敵の攻撃 7-14

26:7 まことに、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは、王の王、バビロンの王ネブカデレザルを、馬、戦車、騎兵をもって多くの民の集団とともに、北からツロに連れて来る。26:8 彼は畑にいる娘たちを剣で殺し、おまえに向かって壘を築き、塹壕を掘り、大盾を立て、26:9 城壁くずしをおまえの城壁に向けて配置し、やぐらを斧で取りこわす。26:10 その馬の大群の土煙はおまえをおおう。彼が城門にはいるとき、打ち破られた町にはいる者のように、騎兵と、車両と、戦車の響きに、おまえの城壁は震え上がる。26:11 彼は、馬のひづめで、おまえのちまたをすべて踏みにしり、剣でおまえの民を殺し、おまえの力強い柱を地に倒す。

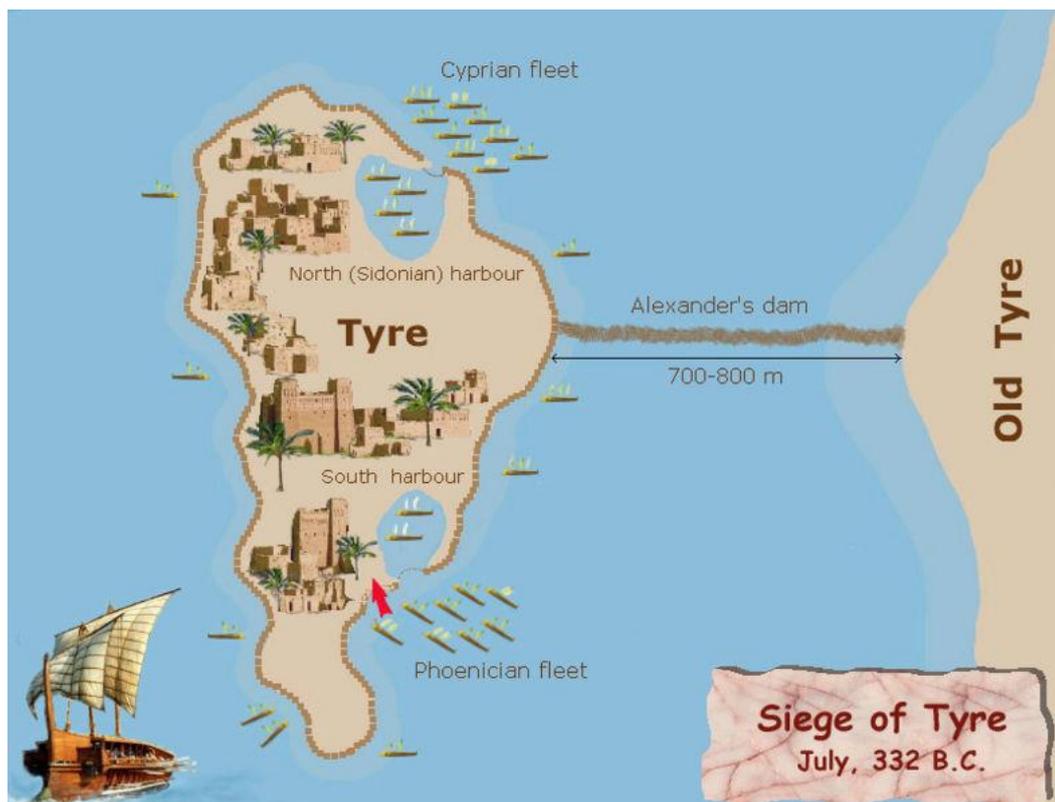
ネブカデネザルは、エルサレムを紀元前 586 年に倒すと、今度はツロに向かいました。エルサレムは包囲して 2 年間弱で倒れましたが、ツロも短い期間の包囲で倒せると言いました。ところが、13 年かかっています。なぜか？ツロには自分たちの味方である地中海があるからです。城壁をバビロンが包囲しても、海のほうから必要な物資をツロは調達しています。ツロの海軍は世界で最も強力だったので、バビロンでも太刀打ちできません。それでも、町にいる人々はバビロンの包囲に嫌気が差してきました。10 節にあるように、馬の鳴き声や、戦車の響きで本当にうるさいです。そして土煙が舞い上がるので、奥さんが、家がすぐにほこりで汚くなります。そこでツロの住民は海岸から 1 キロ近く離れたところにある島に移り住みました。少しずつツロの町にあるものを島のほうに動かしていきました。

そしてついに 13 年目にネブカデネザルが城壁を崩したときには、ツロの町の中は、がらんどうだったのです。それで彼は怒りくるって、その中にある建物をみな破壊して瓦礫の山とさせました。そのことが 29 章 18 節にこう書いてあります。「人の子よ。バビロンの王ネブカデレザルはツロ攻撃に自分の軍隊を大いに働かせた。それで、みな頭ははげ、みな肩はすりむけた。それなのに、彼にも彼の軍隊にも、ツロ攻撃に働いた報いは何もなかった。」略奪品が何もなかったのです。

26:12 おまえの財宝は略奪され、商品はかすめ奪われ、城壁はくつがえされ、住みごちのよい家は取りこわされ、石や、木や、ちりまでも、水の中に投げ込まれる。26:13 わたしはおまえの騒がしい歌をやめさせる。おまえの立琴の音ももう聞かれない。26:14 わたしはおまえを裸岩とする。おまえは網を引く場所となり、二度と建て直されない。主であるわたしが語ったからだ。.. 神である主の御告げ。..

日本語訳では分かりませんが 12 節から主語の代名詞が変わっています。11 節までは、ネブカデネザルを指し示す「彼」が主語でしたが、12 節からは「彼らは」となっています。一つの出来事の預言のように見えるこの箇所は実は、二つの大きなツロ攻撃の出来事を描いていたのです。12 節以降は、紀元前 332 年に起こりました。ギリシヤのアレキサンダーが遠征に進みます。彼はペルシヤと戦うべく東に進みたかったのですが、まずその前にパレスチナ地方の国々を制圧し、そしてエジプトを倒さなければいけません。ペルシヤと戦っている時に後ろから叩かれる可能性があるからです。

それで南下しましたが、ツロに対して平和裏に引き下がってほしいと願い使者を送りましたが、ツロは無残にも殺してしまいました。それでアレキサンダーは、その新しい島にあるツロを倒すべく行動に移しました。海から船で、城壁に囲まれたその島を攻略することは全然できませんでした。そこで



アレキサンダーはとんでもないことを考えつきました。陸から島までの土手道を作ることです。ツロに残っている瓦礫を海の中に放り込み、そしてツロの土で平らにして、城壁崩しを前に少しずつ進めたのです。ツロの住民は最初馬鹿にしていたのですが、ついに城壁が崩れ、町の中に一番先に入ったのは、本人アレキサンダーだと言われています。そしてツロの町を徹底的に破壊し、住民を奴隷として捕らえ移しました。この土手道について、エゼキエルは、「石や、木や、ちりまでも、水の中に投げ込まれる。」と預言したのです。

ツロの町は 200 年前まで、半島と考えられていました。上空からの写真を撮ると、確実に半島です。ところが、考古学者の人たちがここを訪れた時に、裸石の上で網を引いている漁師に話しかけましたが、その裸石をじっくり見るとそれは天然のものではなく、人工のものであることに気づいたのです。土手道は、長年かけて、海流によって土が回りに堆積し、半島になったのです。ここまで正確に、詳細に起こることを言い当てるのは、天文学的数字の確立になります。だから、主は「主であるわたしが語ったからだ。」と言われているのです。

3C 島々の身震い 15-18

26:15 神である主はツロにこう仰せられる。刺された者がうめき、おまえの中で虐殺が続けられ、おまえがくずれ落ちるとき、その響きに、島々は身震いしないだろうか。26:16 海辺の君主たちはみな、その王座をおり、上着を脱ぎ、あや織りの着物を脱ぎ、恐れを身にまとい、地面にすわり、身震いしながら、おまえのことでおののき、26:17 おまえについて、哀歌を唱えて言う。海に住む者よ。おまえはどのように海から消えうせたのか。海で強くなり、ほめはやされた町よ。すべての住民を恐れさせたその町とその住民よ。26:18 今、島々はおまえがくずれ落ちる日に身震いし、海沿いの島々はおまえの最期を見ておびえている。

ツロによって作られた都市が、地中海の周辺を覆っています。そしてツロとの貿易によって収益を得ていた数多くの国々があります。これらの人々が、ツロがなくなったことで多額の損失を負うことになり、嘆き悲しんでいる姿がここに書いてあります。

4C 地下の国 19-21

26:19 まことに、神である主はこう仰せられる。わたしがおまえを廃墟の町とし、住む者のない町々のようにするとき、深淵をおまえの上にわき上がらせ、大水がおまえをおおうとき、26:20 わたしがおまえを穴に下る者たちとともに昔の民のもとに下らせるとき、わたしはおまえを穴に下る者たちとともに、昔から廃墟であったような地下の国に住ませる。わたしが誉れを与える生ける者の地におまえが住めないようにするためだ。26:21 わたしはおまえを恐怖とする。おまえはもう存在なくなり、人がおまえを尋ねても、永久におまえを見つけることはない。・・神である主の御告げ。・・」

これは単に海の中にツロの町が沈んだことを描いているだけではありません。「地下の国に住まわせる」と主は言われます。かつてバビロンの王に対してイザヤが預言した時も、この下界の陰府のことを話しました。「下界のよみは、あなたの来るのを迎えようとざわめき、死者の霊たち、地のすべての指導者たちを揺り起こし、国々のすべての王を、その王座から立ち上がらせる。彼らはみな、あなたに告げて言う。『あなたもまた、私たちのように弱くされ、私たちに似た者になってしまった。』あなたの誇り、あなたの琴の音はよみに落とされ、あなたの下には、うじが敷かれ、虫けらが、あなたのおおいとなる。(イザヤ 14:9-11)」したがって、神の裁きはその地上における破滅のみならず、その滅んだ後にも地下において閉じ込められるという、永遠の裁きを表しています。その詳しい様子は、31章のエジプトに対する裁きの中に出てきます。

2B 海の真ん中で沈む船 27

27章では、ツロの誇っていた栄華が、脆くも衰えてしまう様子を、地中海に浮かぶ豪華商船が荒れ狂う風によって、一瞬にして沈没する姿として例えています。まるで、絶対に沈まないと思われていたタイタニック号が、氷山にぶつかって沈没した事故を彷彿させるような話です。人間の栄え、

その傲慢と高慢が、瞬く間に衰え果てることを覚えます。

1C 海の中の領土 1-25

1D 船と城壁の美しさ 1-11

27:1 次のような主のことばが私にあった。27:2 「人の子よ。ツロについて、哀歌を唱えよ。27:3 あなたはツロに言え。海の出入口に住み、多くの島々の民と取り引きをする者よ。神である主はこう仰せられる。ツロよ。『私は全く美しい。』とおまえは言った。27:4 おまえの領土は海の真中にあり、おまえを築いた者は、おまえを全く美しく仕上げた。27:5 彼らはセニルのもみの木でおまえのすべての船板を作り、レバノンの杉を使って、おまえの帆柱を作った。27:6 バシヤンの櫂の木でおまえのかいを作り、キティムの島々の桧に象牙をはめ込んで、おまえの甲板を作った。27:7 エジプトのあや織りの亜麻布が、おまえの帆であり、おまえの旗じるしであった。エリシャの島々からの青色と紫色の布が、おまえのおおいであった。27:8 シドンとアルワデの住民が、おまえのこぎ手であった。ツロよ。おまえのうちの熟練者が、おまえの船員であった。27:9 ゲバルの長老と、その熟練者がおまえのうちにあって、破損を修理し、海のすべての船とその水夫たちが、おまえのうちにあって、おまえの商品を商った。27:10 ペルシヤ、ルデ、プテの人々は、おまえの軍隊の戦士であり、おまえに盾とかぶとを掛け、彼らはおまえに輝きを添えた。27:11 アルワデとヘレクの人々はおまえの回りの城壁の上に、また、ガマデ人はおまえのやぐらの中において、回りの城壁に丸い小盾を掛け、おまえを全く美しくした。

ツロのうぬぼれは、「私は全く美しい。」という言葉に表れています。全ての栄華と美は、神から出ているというのが、福音の真理です。イスラエルの王ダビデについて、「2サムエル 5:12 **ダビデは、主が彼をイスラエルの王として堅く立て、ご自分の民イスラエルのために、彼の王国を盛んにされたのを知った。**」とあります。すべて主から来て、自分は何も持っていないことを知っている発言です。ところが、主を知らないと、あるいは忘れると、自分のもっているものは自分のものであるという思いが出てきて、それが当然の権利であるかのようにみなします。

これは海の島々から、また、世界から集めた材料で造られた豪華商船です。各地の最も良質のもので造られています。船を扱っている人々も最も熟練した人々でした。ツロの海軍は傭兵によるものでした。愛国心や忠誠心ではなく、完全に経済的な契約によって外国人を自分の兵士として雇うのです。

2D 世界の品々 12-25

27:12 タルシシュは、おまえがあらゆる財宝に豊かであったので、おまえと商いをし、銀、鉄、すず、鉛を、おまえの品物と交換した。27:13 ヤワン、トバル、メシエクはおまえと取り引きをし、人材と青銅の器具とおまえの商品と交換した。27:14 ベテ・トガルマは馬、軍馬、騾馬を、おまえの品物と交換した。27:15 デダン人はおまえと取り引きをし、多くの島々はおまえの支配する市場であり、

彼らは象牙と黒檀とおまえにみつぎとして持って来た。27:16 アラムは、おまえの製品が豊かであったので、おまえと商いをし、トルコ玉、紫色の布、あや織り物、白亜麻布、さんご、ルビーを、おまえの品物と交換した。27:17 ユダとイスラエルの地もおまえと取り引きをし、ミニテの小麦、いちじく、蜜、香油、乳香を、おまえの商品と交換した。27:18 ダマスコも、おまえの製品が多く、あらゆる財宝が豊かなので、ヘルボンのぶどう酒と、ツアハルの羊毛でおまえと商いをした。27:19 ダンとヤワンもおまえの品物と交換した。その商品の中には、ウザルからの銑鉄、桂枝、菖蒲があった。27:20 デダンは鞍に敷く織り布でおまえと取り引きをした。27:21 アラビヤ人と、ケダルの君主たちもみな、おまえの御用商人であり、子羊、雄羊、やぎの商いをした。27:22 シェバとラマの商人たちはおまえと取り引きをし、あらゆる上等の香料、宝石、金を、おまえの品物と交換した。27:23 カラン、カネ、エデン、それにシェバの商人たち、アッシリヤとキルマデはおまえと取り引きをした。27:24 彼らは豪華な衣服や、青色の着物、あや織り物、多彩な敷き物、堅く燃った綱とおまえの商品とをもっておまえと取り引きをした。27:25 タルシシュの船がおまえの品物を運んだ。おまえは海の真中で富み、大いに栄えた。

ツロを行き来する他国の船の積み荷が列挙されています。「取引する」「交換する」「商いをする」という言葉、「品物」「商品」と繰り返されているところに、貿易によってツロの町が栄えたことが表れています。その範囲は文字通り「世界」であり、スペインにあったと言われるタルシシュを筆頭とし、エジプトなどの北アフリカ、アラビヤ半島、そしてアッシリヤなどイラクやイランの方面にまで及びました。そして、ツロの船は、「タルシシュの船」と呼ばれます。当時の世界においては「西の果て、遠くにある場所」を示しています。そこは鉱山が発達していて、ソロモン王もツロを仲介してタルシシュと交易していました(1列王 10:22)。それでタルシシュとツロとの結びつきは強く、交易を目的とした遠洋航海のための大型の船が建造されて、大規模な商船隊が組まれて、それが「タルシシュの船」と呼ばれました(2歴代誌 9:21)。

2C 世界にもたらす恐怖 26-36

27:26 おまえのこぎ手はおまえを大海原に連れ出し、東風は海の真中でおまえを打ち破った。

地中海は時にものすごい暴風が吹きます。パウロが囚人としてローマ皇帝のもとに連れて行かれる時、彼を乗せたイタリヤ行きの船が暴風に見舞われました。使徒行伝 27 章に書いてありますが、「ユーラクロン」という北東風が陸から吹きそれで遭難しました。多くの船は、そのような暴風が吹けば遭難することを恐れて地中海の大海原まで漕ぎ入れることはありませんし、特に暴風の季節は航行を避けたのですが、ツロはそんなことを度外視して自分の美しさを誇って動いていたのです。ところが、それが仇となり沈没してしまったということです。26 節の「東風」はもう一つの意味を持っています。東方からツロを攻めてきたバビロンのネブカデネザルのことを暗示しています。自分たちの富に安住していたツロに対して、バビロンがその町を包囲し、攻略したという 26 章の預言を指し示しているのです。

27:27 おまえのくずれ落ちる日に、おまえの財宝、貨物、商品、おまえの水夫、船員、修繕工、おまえの商品を商う者、おまえの中にいるすべての戦士、おまえの中にいる全集団も、海の真中に沈んでしまう。27:28 おまえの船員の叫び声に海辺は身震いする。27:29 かいを取る者、水夫、海の船員はみな、船から降りて陸に立ち、27:30 おまえのために大声をあげて激しく泣き、頭にちりを振りかけ、灰の中をころび回る。27:31 彼らはおまえのために頭をそり、荒布をまとい、おまえのために心を痛めて泣き、いたく嘆き、27:32 泣き声をあげて哀歌を唱え、おまえのために悲しんで歌う。だれかツロのように海の真中で滅ぼされたものがあるだろうか。27:33 おまえの貨物が陸揚げされると、おまえは多くの国々の民を満ち足らせ、その豊かな財宝と商品で地の王たちを富ませた。27:34 おまえが海で打ち破られたとき、おまえの商品、全集団は、おまえとともに海の深みに沈んでしまった。27:35 島々の住民はすべておまえのことでおぞ気立ち、その王たちはひどく恐れて、あわてふためいた。27:36 国々の民の商人たちはおまえをあざけり、おまえは恐怖となり、とこしえになくなってしまう。」

他のツロの船の船員たちが、転げまわって船の沈没を嘆き悲しんでいます。そして、貿易をしていた世界の国々も恐れ、慌てます。これがツロの貿易に表れている商業主義の正体です。ツロへの哀歌と極めて似ている預言が黙示録 18 章にあります。大バビロンが一日にして倒れ、王たち、商人たち、船乗りたちがみな嘆き悲しんでいる姿を読むことができます。けれども、最後のところで、「おまえの商人たちは地上の力ある者どもで、すべての国々の民がおまえの魔術にだまされていたからだ。(黙示 18:23)」とあります。魔術なのです。実体がなく、幻想の中に浮かれていたのです。そこで、その大きな都で預言者や聖徒たちが殺されている血が報いを受けていることが書かれています。そうです、神を信じ、キリストを信じるということは、こうした巨大な富の蓄積のような世から重圧を受けている、ということが出来ます。「1ヨハネ 2:16-17 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもなげええます。」

3B 自分を神とする愚かさ 28

1C 刺し殺される君主 1-10

28:1 次のような主のことばが私にあった。28:2 「人の子よ。ツロの君主に言え。神である主はこう仰せられる。あなたは心高ぶり、『私は神だ。海の真中で神の座に着いている。』と言った。あなたは自分の心を神のようにみなしたが、あなたは人であって、神ではない。28:3 あなたはダニエルよりも知恵があり、どんな秘密もあなたに隠されていない。28:4 あなたは自分の知恵と英知によって財宝を積み、金や銀を宝物倉にたくわえた。28:5 商いに多くの知恵を使って財宝をふやし、あなたの心は、財宝で高ぶった。28:6 それゆえ、神である主はこう仰せられる。あなたは自分の心を神の心のようにみなした。28:7 それゆえ、他国人、最も横暴な異邦の民を連れて来て、あなたを攻めさせる。彼らはあなたの美しい知恵に向かって剣を抜き、あなたの輝きを汚し、28:8 あ

なたを穴に投げ入れる。あなたは海の真中で、刺し殺される者の死を遂げる。28:9 それでもあなたは、自分を殺す者の前で、『私は神だ。』と言うのか。あなたは人であって、神ではない。あなたはあなたを刺し殺す者たちの手の中にある。28:10 あなたは異邦人の手によって割礼を受けていない者の死を遂げる。わたしがこれを語ったからだ。・・神である主の御告げ。・・」

ツロの君主に対する預言です。彼は歴史上では「エテバアル三世」であると考えられます。バビロンがツロの町を倒す時にいた王です。彼は自分を神とみなしていました。異教徒ですから、異教の中では何でも神々にしてしまうから仕方がないと言えばそうなのですが、しかし、ここで神が問題にされているのは、人間の中に潜む根本的な高ぶりです。物事が自分の思うとおりに動くと、それを神が行なわれた事として考えるのではなく、自分が行なった事だと考えるのです。これはまさしく、神の座に自分の身を置いているツロの王と変わらない欲望なのです。エバが悪魔に惑わされた時、これが彼女の欲望でした。神のようになり、自分を賢くするという木がいかにも好ましかった、とあります(創世 3:5-6)。

3 節で、神は皮肉をもって、ツロの君主を「ダニエルよりも知恵があり」と仰られています。もちろんダニエルの知恵は霊的な知恵ですから、ツロの君主の知恵とは種類が違います。けれども、そうツロの君主が神の知恵をないがしろにして、自分のものであると考えていたので、神がそれを当てこするように言われているのです。そして 7 節以降に、バビロンのツロに対する攻略が書かれています。エテバアル三世をネブカデネザルは取り除くのですが、このことによって彼が単なる人間にしか過ぎないことを神は示されました。

2C ツロの王ケルブ 11-19

28:11 次のような主のことばが私にあった。28:12 「人の子よ。ツロの王について哀歌を唱えて、彼に言え。神である主はこう仰せられる。あなたは全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった。28:13 あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石があなたをおおっていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、しまめのう、碧玉、サファイヤ、トルコ玉、エメラルド。あなたのタンバリンと笛とは金で作られ、これらはあなたが造られた日に整えられていた。

ここで預言の対象が、「ツロの君主」から「ツロの王」に移っています。君主は、エテバアル三世なのですが、彼を背後で動かしていた霊的存在がいます。それが悪魔です。イザヤ書 14 章にも、同じような預言があります。バビロンに対する預言において王に対する嘲りの歌があります。けれども途中から、人間の王についての説明を超える天的な存在への預言に変わります。明けの明星、ルシファーです。その他、ダニエル書ではペルシヤやギリシヤなどの国の背後に、「君」がいるとして、イスラエルの君にはミカエルがついていることを教えています。したがって、私たちがこの世にいれば、ツロの栄華のように高ぶりの中に陥ってしまう。そしてその高ぶりは、この世の君である悪魔に吹き込まれているものなのだ、ということでもあります。だから、悪魔が自分が神のようになり

たいと願ったように、あたかも自分が神であるように何でもできるとしてしまうのです。

これは、いろいろな形でやって来ます。ペテロのことを思い出してください。イエス様が生ける神の御子キリストですという告白をした後に、主がこれから自分は十字架につけられ、三日目によみがえると言われました。そしてペテロは、「主よ。とんでもないことです。そんなことが、あなたにあるはずがありません。」といさめました。するとイエス様は、「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。(マタイ 16:23)」と言われました。善意と呼ばれるものの中にも、努力と呼ばれるものの中にも、いろいろなところに潜んでいます。悪魔に立ち向かう方法は、ここで主が言われているように「神のことを思う」ことです。ヤコブが手紙で言っているように、「神に従う」ことです。

ここでツロの王は、美の極み、宝石に囲まれています。ここに出てくる宝石の種類は、大祭司の装束の胸当てに付けられている12の宝石や黙示録21章の天のエルサレムの土台石と重なり、ゆえに神の栄光と美を表しているものです。その輝きの残像を残したまま、サタンは私たちを惑わします。コリント第二11章14節には、「サタンでさえ光の御使いに変装するのです。」とあります。そして彼はエデンの園にいます。創世記3章にエデンの園で蛇が出てくるのは、実は最初の出来事ではありませんでした。その前に、ここエゼキエル書38章で、墮落する前のサタンの姿が出ているのです。さらに興味深いのは、「タンバリンと笛とは金で作られ」とあり、彼は賛美と礼拝を導く天使長であることが分かります。

28:14 わたしはあなたを油そそがれた守護者ケルブとともに、神の聖なる山に置いた。あなたは火の石の間を歩いていた。28:15 あなたの行ないは、あなたが造られた日からあなたに不正が見いだされるまでは、完全だった。28:16 あなたの商いが繁盛すると、あなたのうちに暴虐が満ち、あなたは罪を犯した。そこで、わたしはあなたを汚れたものとして神の山から追い出し、守護者ケルブが火の石の間からあなたを消えうせさせた。28:17 あなたの心は自分の美しさに高ぶり、その輝きのために自分の知恵を腐らせた。そこで、わたしはあなたを地に投げ出し、王たちの前に見せものとした。28:18 あなたは不正な商いで不義を重ね、あなたの聖所を汚した。わたしはあなたのうちから火を出し、あなたを焼き尽くした。こうして、すべての者が見ている前で、わたしはあなたを地上の灰とした。28:19 国々の民のうちであなたを知る者はみな、あなたのことでおののいた。あなたは恐怖となり、とこしえになくなってしまう。」

14節の訳が直訳ではありません。「あなたは油注がれた守護者ケルブ。わたしはあなたを置いた。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いていた。」が直訳であります。つまり、墮落する前のサタンは、ケルビムの一人だったのです。1章や10章において、ケルビムが主の御座の下にいた姿を見ましたが、太初の昔、その一人が墮落しました。「聖なる山」とありますが、これは天の御座のことでしょう。そしてここにあるように、彼はその美しさによって高ぶり、うぬぼれ、罪を

犯しました。そして「商い」をしているのですが、これはツロの王の背後にサタンが働いていたからです。そしてその高慢をもって神に反逆していたので、地に投げ出されます。ツロの王はここにあらうように、人々の前で焼き尽くされますが、それはサタン本人の行末を表してもいます。

エデンの園で蛇となってエバに出て来た時には、彼はこの墮落の後に神の御座から追放された状況であったと考えられます。ヨブ記にも、天の神の御座のところから落ちて、次に空中を支配する者となりました。ヨブ記には、サタンが神の前に出てくる様子を見ることができます。エペソ書には、「空中を支配する者」として出てきます。そして黙示録 12 章によると、大患難の半ばで悪魔とその手下どもが地上に投げ落とされるのを見ます。この時に地上での災いが極みに達します。悪魔が暴れまくるからです。それから悪魔は底知れぬ所で鎖につながれます。地上はキリストを王とする神の国があります。けれども千年後に鎖は解かれ、悪魔はさらに人々を惑わしますが、最後は火と硫黄の池に投げ込まれます。だから、どんどん下へ下へと落ちていくのです。

3C シドンの刺 20-26

28:20 次のような主のことばが私にあった。28:21 「人の子よ。顔をシドンに向け、それに預言して、28:22 言え。神である主はこう仰せられる。シドンよ。わたしはおまえに立ち向かい、おまえのうちでわたしの栄光を現わす。わたしがシドンにさばきを下し、わたしの聖なることをそこに示すとき、彼らは、わたしが主であることを知ろう。28:23 わたしはそこに疫病を送り込む。そのちまたには血が流れ、四方から攻める剣のため、刺し殺された者がその中に倒れる。このとき、彼らはわたしが主であることを知ろう。28:24 イスラエルの家にとって、突き刺すいばらも、その回りから彼らに痛みを与え、悔るとげもなくなる時、彼らは、わたしが神、主であることを知ろう。

最後は、シドンに対する神の預言です。シドンはツロから北に約 30 キロのところにある沿岸都市でツロと一組でしばしば語られます。シドンが行なったことでイスラエルの棘になったのは、バアル崇拝を持ち込んだことです。覚えていますが、北イスラエルの王アハブの妻イゼベルが、シドン出身でした。列王記第一 16 章 31 節と 32 節を読んでみたいと思います。「彼にとっては、ネバテの子ヤロブアムの罪のうちを歩むことは軽いことであった。それどころか彼は、シドン人の王エテバアルの娘イゼベルを妻にめとり、行ってバアルに仕え、それを拝んだ。さらに彼は、サマリヤに建てたバアルの宮に、バアルのために祭壇を築いた。」この罪のゆえに、シドンは神から裁かれました。神の民を物理的に攻撃するのではなく、自ら神の裁きを受けるように罪を犯させるつまずきを作ったのです。黙示録 2 章のテアテラにある教会でも、同じ名前のイゼベルが人々を不品行に陥らせてつまずかせ、それゆえその女を病に落とし込まれました。同じように、シドンにも疫病が送り込まれて滅ぼされます。そしてこのことにとって、イスラエルはようやく、自分に突き刺していた茨や痛みが取り除かれるのです。

さて、ここまで見てきましたが、これらの周囲の国々が滅ぼされることによって、ついにイスラエ

ルが回復します。

28:25 神である主はこう仰せられる。わたしがイスラエルの家を、散らされていた国々の民の中から集めるとき、わたしは諸国の民の目のまえで、わたしの聖なることを示そう。彼らは、わたしがわたしのしもべヤコブに与えた土地に住みつこう。28:26 彼らはそこに安らかに住み、家々を建て、ぶどう畑を作る。彼らは安らかにそこに住みつこう。回りで彼らを侮るすべての者にわたしがさばきを下すとき、彼らは、わたしが彼らの神、主であることを知ろう。」

エルサレムが滅びた時に侮っていた者たちを主が滅ぼされ、そして捕え移されていたイスラエル人を神が再び集めてくださり、そこに住まわせてくださいます。そして安らかに住み着くことによって、そのことが彼らを侮っていた国々に対する裁きとなります。私がエルサレムのヤド・バシエムで、ホロコーストで殺された子供たちの名を覚える建物を出た後で、そこに丘の上に建てられている家々を遠くに見ました。ユダヤ人のガイドが、「これが私たちの復讐です。」と言いました。虐殺をしたナチス・ドイツに復讐するのではなく、自分たちが安らかに住むことによって、それが彼らに対する裁きを意味している、ということです。

私たちは、このようにして二つの悪の中に生きています。一つは復讐や憎しみ、です。この世には憎しみや敵愾心、赦さない無慈悲があります。キリスト者はその反対に、赦しと和解、平和の使者です。教会は、キリスト者は、これらの憎しみや仕返しとは無縁の存在です。さらに、高ぶりとも無縁の存在です。自分たちを高めることが世の生活であるのに対して、私たちはへりくだり、神の器として徹する生活をします。そして主は世を滅ぼされます。イスラエル人が安らかに約束の地に住むように、私たちも御国を受け継ぎ、安息に入ります。